

# 365日復興を祈る peace やまぶき

あの日から7年。川越ではpeaceやまぶきに寄る福島復興まつりがウエスタ川越で7回目を数えた。

入場チケットは30分で完売の盛況ぶり。出店件数当初は6店舗が5倍増に。売り上げ金の一部を福島の障がい者施設に6年間送り続けてきた。

「少額でも送り続けていくことが大切。手作り品をバザールに出す人はこの日のために1年間作製されてます。それは復興を365日祈っているということでもあります。震災を風化させない、その強い気持ちでわたしたちは頑張っています。」と語るのはスタッフの山口陽子さん。

復興まつりではこの他日色ともゑさんのトークショーも。またウエスタ川越ではこの日、川越マルシェも開かれ、相乗効果を生み出すイベントとなった。

---

## 震災を忘れない あなたは何を？

未曾有の大災害となった東日本大震災から6年。

春まだ浅き風の冷たい中で「あの日」を思った。

お彼岸前のお墓掃除をするために入間市を通過。昨日は市議選挙の最終日だった。3月11日、14時46分。宣伝カーをとめて、候補者、揃いのジャンパーを着た候補者を応援する人、が頭をたれていた。

「常に心を寄せる姿」。有権者ではないが、その真摯な姿に胸を打たれた。去年は東北であの日を迎えた。大きなサイレンが鳴り、すべての人が動きを止め太平洋側を向いて「黙とう」していた。

日本人の美しい心。今年は政治に取り組む人から感じた。どこかの街の議場で眠る議員がいると聞いたここ数日、「人間の未来は明るい」と入間市民をうらやんだ。

---

# あの日を忘れない

所用で秋田に滞在。

昨日3月11日、14時40分すぎ、スーパーの駐車場で地域の有線放送からのアナウンスを聞いた。

東日本大震災で被害にあわれた方に哀悼を意を表し  
黙祷を捧げる準備をしようという内容だった。

スローモーションの映像のごとく、国道に車を停める人。帽子をとる高齢の老夫婦。

14時46分の時報とともに長いサイレンの音。

東北の空のもと黙祷をすることに、ある種の厳粛な気持ちを抱いた。

仮設住宅で不自由な思いをする人々。行方不明の親族に涙を流す人々。  
復興は国をあげて取り組むべき最優先課題。

お香典問題で陳謝した高木復興大臣。「何があっても職責を全うする」と発言されていたが、この時期、メディア露出が少ない気もする。バリバリ働き、復興を前進させていくことこそ、高木大臣の職責の全うであろう。

東北復興を願うと共に、高木大臣の復興旗振りに注目したい。

---

## 東日本大震災に心を寄せる 2016

あの日のごとは、今でも鮮明だ。会社スタッフ13名をつれて池袋で講習中。会場カラオケボックス店長から、会計なしで、退出くださいと。西池袋公園にはすごい人。駅から東武デパートから押し寄せる人の波。スタッフつれてホテルメトロポリタンの部屋を借りようとしたが、幸運にも一階レストランの席に案内された。暖房はオフになったがホテルからの毛布と飲み物の提供。西武線が動いたものの、川越からの迎えの車をひたすら待った。

未明の254号を歩く人々。車のラジオからは未曾有の被害が。

そして、計画停電。ガソリン不足、スタンド渋滞。食品流通の乱れ。  
当時、認知症初期であった母も、計画停電には「東北の人のこと考えたら当たり前。  
こういう時は布団にはいって体を休める時間にすればいいのよ」と話していた。

友人のなかには、現地で炊きだし支援、ヘドロの掻き出し支援で定期的に訪問して  
いる人が数名いた。頭が下がった。

自分は？いくばくかの寄付もした。義援金を募るコンサートの手伝い。  
東北で消費することが地域経済を助けることかと、岩手、福島、仙台へでかけた。

当時の国際ロータリー第2570地区ガバナー西川武重郎さん（故人）は「寄付を  
することは誰しものが色々な形でできること。この地震を風化させないことが肝要。  
いつまでも心を寄せること、それが大事。」と熱くPRして「ロータリー希望の風」-  
という基金を創設。震災で被害にあった子供たちの学費支援を大学卒業時までとい  
う活動は今でもつづいている。素晴らしいことだ。

何気なく日々を過ごす。笑ったり怒ったり。そういう日常の中で、決して私たちは  
3月11日を忘れてはならない。被害にあわれたすべての人々に心を寄せること。  
- どんなかたちであれ、自分にできる何かを、肝に銘じていきたい。